

## 新型コロナウイルスが与えた影響 ～活動再開の鍵を握るものは何か～

梅田藍子

### 第1章 子ども食堂の再開につながるもの

本稿では、新型コロナウイルスが子ども食堂に与えた影響について論じていく。新型コロナウイルスの感染予防のために多くの子ども食堂が通常開催が困難となっている。では、様々な理由がある中で何が子ども食堂の運営危機に1番影響を与えたのか。私は開催地ではないかと考える。子ども食堂を開催している場所と大きく分けて2つになる。1つは公民館などの施設を借りて開催しているところ。もう1つは自宅をそのまま子ども食堂の開催地として使用しているところである。新型コロナウイルスの影響を大きく受けたのは前者の施設を借りているところである。なぜなら、子ども食堂を再開させたいという主催者の気持ちがあったとしても、施設を運用している側に許可する権限はあるため、主催者だけの意思ではどうにもならないからである。これにより、現在も再開が困難な子ども食堂が、再開に向けて何が必要であるかを検討したい。

### 第2章 子ども食堂再開に必要なこと

新型コロナウイルスの影響で居場所での子ども食堂の開催が難しくなったことによって、今までは見えてこなかったことが可視化された。それは、生活困窮者の存在が浮き彫りになったことである。子ども食堂の利用者の中で今回の新型コロナウイルスの影響を大きく受けたのが生活困窮者であった。日々の生活の支えに子ども食堂がなっていた人も少なくはないだろう。もちろん、生活困窮者のみならず多くの人の居場所として子ども食堂は地域の人から愛されていたと思う。私が子ども食堂にお手伝いをしに参加させていただいたときも、多くの家族連れはもちろん、同級生同士で参加する人もいれば中には近所に住んでいる高齢者の方も子ども食堂に足を運んでいる。ある高齢者の方にお話を聞くと、家の中で1人、ご飯を食べるよりも子ども食堂に来て多くの人と一緒にご飯を食べることが楽しみになっていると話してくれた。このように子ども食堂は老若男女から愛される存在なのだと思う。そんな愛される場所であり、地域の憩いの場でもあり、生活困窮者の人にとっては必要不可欠な子ども食堂が休止となると多くの人が再開を待ち望む理由が理解できるような気がする。

また、生活困窮者に追い打ちをかけるように学校の給食が休止になってしまった。給食は子ども食堂の食事と同じように低額で栄養のあるものがメニューで出されている。その給食がなくなったことによって普段は考えなくてもよかった子どもの昼食のメニューまで考えなければならないようになってしまったのである。

更に昼に母親が家にいることはあまりないため、子ども1人でも食べられるものという縛りまでつけられるのである。子ども1人で調理ができ、低額なものとなるとどうしてもカップラーメンやインスタントのものに頼らなければならなくなる。しかし、そうしてしまうと育ち盛りの子どもの大切な栄養が不足してしまうのであった。このように生活困窮者にとって給食や子ども食堂の休止は影響を与えたのであった。大きく見れば生活困窮者のみに値する問題でもないとも言える。

多くの人が子ども食堂の必要性を改めて感じ、求める声が今まで以上に多くなったので

はないだろうか。この声に答えようと、このまま子ども食堂を休止したままにしているところは少なく、多くの子ども食堂は形を変えて継続をしている。その形を変えた姿がフードパントリーや宅食である。フードパントリーとは食品支援の1つで誰でも必要な時に食材を受け取ることができるサービスのことである。フードパントリーは食材提供のため、日々食べ物に悩まされている人にとってはもちろんありがたいことである。更に外出する機会が減少したと共に他人と会話する機会も減少してしまった。

コロナ前での生活であっても忙しくしていた主婦の人は少なからず、ママ友や友人と会話をするることによって日々の疲れやストレス発散になっていたが、それが新型コロナウイルスという新しいものによって日常が奪われ、家にいる時間が増え、ストレス発散の1つであった人との会話がなくなってしまえば更にストレスが溜まってしまうと思う。そういった人にとって少しでもフードパントリーに足を運び会話をすることでストレスが発散できる場にもなっていたのではないだろうか。今現在では、新型コロナウイルスと共存する生活にも少しは慣れてきたため、感染対策や人数制限などをかけながらではあるが徐々に子ども食堂を再開しているところも増えてきている。

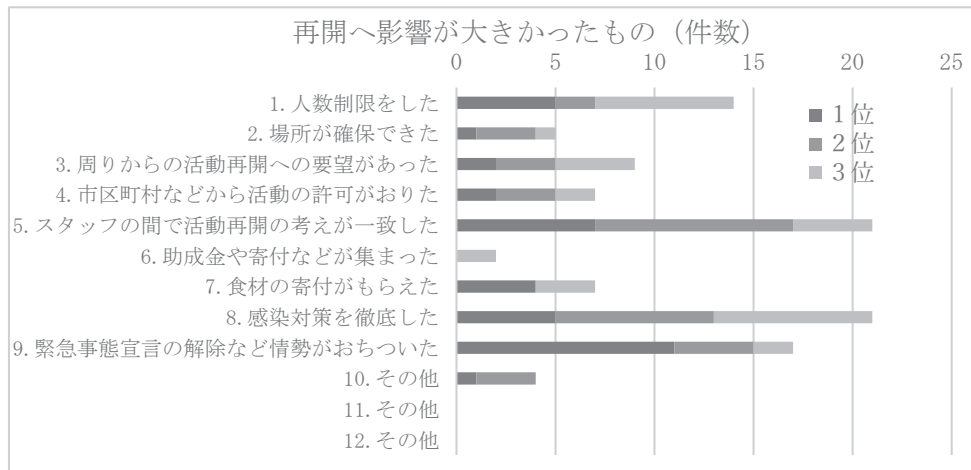
テーマはコロナ禍の子ども食堂であった。新型コロナウイルスの影響で浮き彫りになった子ども食堂の必要性や、どのような子ども食堂がどのような活動形態をとっているのか。更に子ども食堂によって現在も活動休止しているところもあれば、形を変えて子ども食堂を再開させているところもある。そのためどのようなところが活動再開でき、一方でどのようなところがまだ再開の目途が立っていないのか、などと1度まとめてみると今後の方針なども見えてくるのではないかと思い、愛知県全域の子ども食堂を対象に調査をすることとなった。

調査で私は1つの仮説を立てた。第1章で述べたように子ども食堂の再開に1番影響を与えたのは開催地ではないかということである。この仮説を立証するために調査票のQ6の子ども食堂を再開するきっかけ、Q8のコロナ禍によりどのような経緯で活動を変えたかQ4の活動再開の有無、Q9の子ども食堂の運営に連携している機関の中で、会場の提供を頼んでいるところはどのくらいあるのか。の3つを使用していこうと思う。

まず、Q6の結果から見ていく。

Q6	1.人数制限をした	2.場所が確保できた	3.周りからの活動再開への要望があった	4.市区町村などから活動の許可がおりた	5.スタッフの間で活動再開の考えが一致した
1位	5	1	2	2	7
2位	2	3	3	3	10
3位	7	1	4	2	4

6.助成金や寄付などが集まった	7.食材の寄付がもらえた	8.感染対策を徹底した	9.緊急事態宣言の解除など情勢がおちついた	10.その他	11.その他	12.その他
0	4	5	11	1	0	0
0	0	8	4	3	0	0
2	3	8	2	0	0	0



Q6は選択肢12個の中から影響が大きいと思われる順に第1位～第3位まで順位をつけてもらった。表とグラフの結果から見てわかるように1位の票をもっとも多く集めたのは、11票の「緊急事態宣言の解除など情勢が落ち着いた。」であった。続いて2位の票が1番多かったものは10票の「スタッフの間で活動再開の考えが一致した。」であった。そして3位の票が1番多かったものは、8票の「感染対策を徹底した。」であった。

私の仮説では、場所の確保が1番の困難になり得るかと思ったが、結果としては、やはり世間体などが重視されたのではないかと思う。新型コロナウイルスは私たち日常を奪っただけではなく、心に非常に大きなストレスを与えていると思う。私たちが今闘っているのは、目で見ることができないものではなく、未知なる目に見えないウイルスである。そのため人々はこの経験したことのない状況に非常に戸惑い、無意識に他人を傷つけてしまっている人も多いと思う。その例として挙げられるのは新型コロナウイルスにかかってしまった人を差別扱いするなど、ひどい場合であるとまるで犯罪者のように扱われてしまうケースもあった。また今のネット社会が裏目となり、新型コロナウイルスに感染していなくても、「〇〇さんがコロナにかかったらしい。」などデマ情報が流されてしまうこともある。前者の場合は悪意をこめて行っている人も中にはいるが、中には本当に新型コロナウイルスが怖く、ストレスとなり、行動を起こしてしまった人もいるのではないかと考えている。しかし後者は完全に人を貶めようとする行為であるため起きてはならないことである。

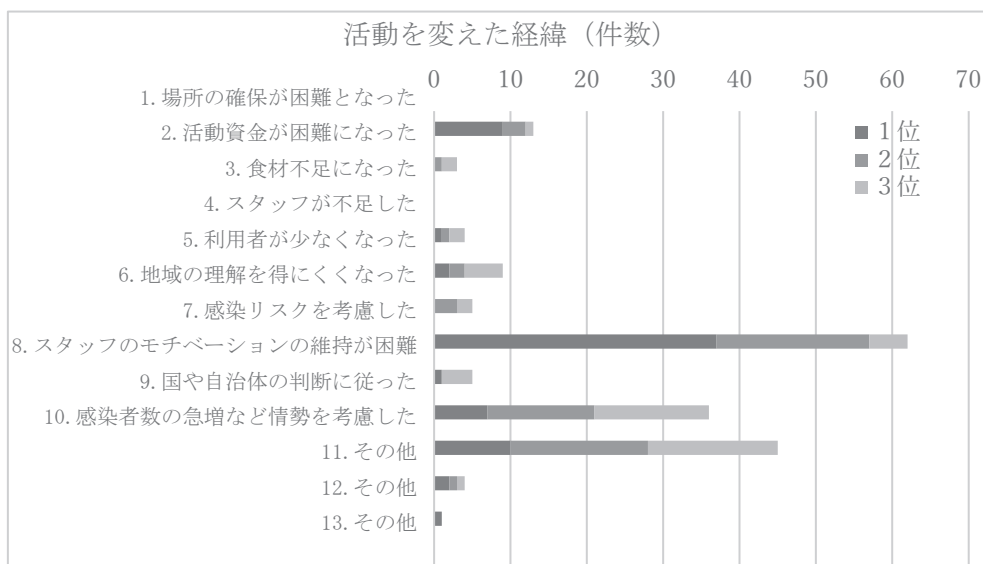
更に善意である子ども食堂の活動にも世間体がまわりついている。何度も言っているように子ども食堂は生活困窮者にはもちろん、街の多くの人から必要とされているものである。しかし、この新型コロナウイルスの影響で子ども食堂を再開しても感染するのが怖いという声やフードパントリーであればまだ認知度がそれほど高くないことも影響し、食べ物のバラマキはやめてくれなどという声も上がってきてしまうのであった。困っている人の助けとなる子ども食堂やフードパントリーでさえ批判の声が上がってしまうのであるため、政府からのいわば命令のような緊急事態宣言の解除が活動再開に大きく影響を与えたのではないかと私は思う。

続いてQ8について見ていく。

Q8	1.場所の確保が困難となった	2.活動資金が困難になった	3.食材不足になった	4.サポーター、ボランティアなどのスタッフが不足した	5.利用者が少なくなった
1位	9	0	0	1	2
2位	3	1	0	1	2
3位	1	2	0	2	5

6.地域の理解を得にくくなった	7.感染リスクを考慮した	8.スタッフのモチベーションの維持が困難となった	9.国や自治体の判断に従った	10.感染者数の急増など情勢を考慮した
0	37	1	7	10
3	20	0	14	18
2	5	4	15	17

11.その他	12.その他	13.その他
2	1	0
1	0	0
1	0	0



Q8もQ6と同様に選択肢13個の中から影響が大きいと思われる順に第1位～第3位まで順位をつけてもらった。表とグラフの結果から見てわかるように1位の票が1番多かったものは37票の「感染リスクを考慮した。」であった。続いて2位の票が1番多かったものは20票で、1位と同じく「感染リスクを考慮した。」であった。そして3位の票が1番多かったものは17票の「感染者数急増などの情勢を考慮した。」であった。この結果からも、私の仮説である場所に関する問題は直接的な原因とならなかった。

この結果から見てわかるようにコロナ前の生活から1番変わったことは感染症対策をしなければならないことである。子ども食堂はほとんどのところが誰でも気軽に立ち寄れる場所であるからこそ、子どもから妊婦、お年寄りまで様々な年代の人がやってくる。しかも食事をするとなるとマスクを外さなければならないため、より一層頑丈な感染症対策が強いられるだろう。また、問題となってくることは子どもがマスクをつけることを嫌が

ってしまうことである。子どもにとって新型コロナウイルスの恐ろしさなどを完璧に理解してもらうことは難しい。更にマスクをすることで息がしにくくなって、外したがる子どもも多いと思う。そのため、いかに子どもに新型コロナウイルスの恐ろしさやマスクの重要性を理解してもらうかが重要になってくるのだと思う。

最後に Q4 と Q9 データを使って見ていく。私は仮説でもいったように開催地が活動再開に 1 番影響を与えていると思う。そこで、Q4 で活動再開していると回答したところでは Q9 の会場の提供の中から、児童館・学童クラブ・公民館・保育所、幼稚園・小中学校、高校・大学・宗教法人・高齢者福祉施設・障害者福祉施設の中でどこに依頼しているのが多いのか。またその反対に活動再開ができていないところはどこに会場提供を依頼しているところが多いのかを調査する。

	児童館	学童クラブ	公民館	保育所、幼稚園	小中学校、高校	大学	宗教法人	高齢者福祉施設	障害者福祉施設
活動再開している	0	1	8	3	1	0	3	3	4
活動再開していない	2	1	9	0	1	0	0	4	0

結果は上の票のようになった。活動再開しているところで会場提供を依頼しているのが 22、活動再開していないところは 17 という結果である。また、活動再開している子ども食堂もしていない子ども食堂もどちらも公民館に会場提供を依頼しているのが多いことがわかった。私の予想では活動再開しているところは自宅などを利用して子ども食堂を開催しているところが多いと思っていたため、会場提供はあまり行っていないのではないかと予想であった。また反対に活動再開していないところは公民館などを利用して子ども食堂を開催しているため、新型コロナウイルスの影響で感染拡大を防ぐために会場の提供を一時的に中断しているのではないかと考えていた。しかし、結果から見てわかるように両者に差ほどの違いはないのだとわかった。

### 第 3 章 子ども食堂運営者の思い

ここから、私が去年の 7 月から子ども食堂のお手伝いをさせていただいている、「おかださんの台所」の岡田さんに新型コロナウイルスの影響を受けた中で子ども食堂についてお話を伺ったため、その内容を述べていこうと思う。

おかださんの台所は名古屋市北区志賀町に位置している。自宅をそのまま子ども食堂として利用しており、主にご夫婦で営んでいる。そこにボランティアスタッフが加わり子ども食堂を運営している。おかださんの台所の始まりは 2017 年 7 月 21 日に記念すべき第 1 回が開催された。

そもそも岡田さんが子ども食堂を始めたきっかけは熱田区にある子ども食堂「なかよしごはん」さんに見学を訪れたことである。「なかよしごはん」は玄関を上がってすぐに和室があり、そこに子どもたちが自由に入っていき姿を見て敷居が低いところだと感じたそう。誰かがおそろおそろ入っていくのではなく、誰でも自由には入れて、リラックスできる空間を感じ、すぐに岡田さんはうちでも子ども食堂を開くことを決心したのだ。もともと岡田さんは地域の小学校の PTA を務めていた。その PTA の勤めが終了した後に「ま

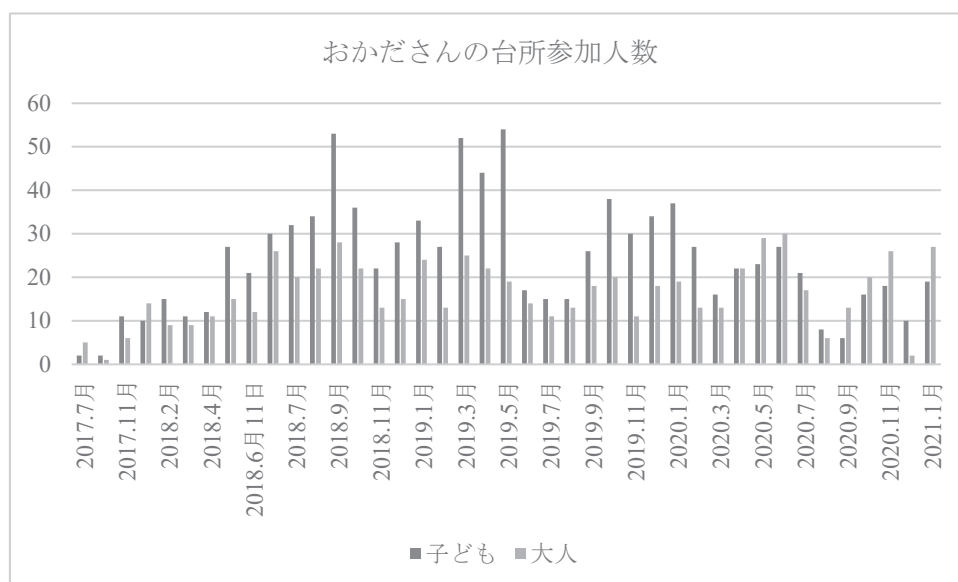
だ、若いのだから地域のために何かやったらどうですか。」といわれていたこともあり、地域のためになる子ども食堂を開く後押しになったそうだ。

また更に7年前から保護司活動も行っているそうだ。保護司活動とは、少年犯罪を起こしてしまった人達を将来同じ過ちを繰り返さないように正当な道に進んでもらうべく助言や指導を行う活動のことである。ある少年が起こしてしまった犯罪の理由が、家族とのすれ違いの生活の中から生まれてしまうような居場所がないことであった。これを聞いた岡田さんは子ども食堂のような誰でも参加できるような居場所があればこのような事態にはならなかったのではないかと感じるようになり、子ども食堂を開く中でも居場所があるということに重きを置いて子ども食堂をスタートさせたのである。居場所に重きを置いているからこそ、子ども食堂でただご飯を食べるだけではなく、くじやゲームにお菓子のつかみ取りなど子どもが楽しめるようなコンテンツも用意するのがおかださんの台所の特徴であると言える。このように居場所を大切にすることによって結果的ではあるが、世代を超えた交流ができていないのではないかと話していた。岡田さんには成ゼミで行ったアンケート調査にもご協力いただいた。そのうえでおかださんの台所が受けた新型コロナウイルスの影響についてお話を伺った。子ども食堂は飲食店とほとんど同じように飲食をする場であるため新型コロナウイルスの影響のもろに受けている。新型コロナウイルスが日本に感染し始めた頃である2020年の3月の時点では約3割の子ども食堂しか開催できていない状態であり、残りの7割の子ども食堂は途方に暮れている状況であった。その時のおかださんの台所の活動方法と子ども食堂開始からの参加人数のグラフを以下にまとめる。

2020. 2月→コロナ前と変わらず開催

2020. 3月～6月→お弁当配布のみ

2020. 7月～現在→お弁当配布 or その場で食べる（選択可能）



ここで私の立てていた仮説の話の少ししたいと思う。私は新型コロナウイルスの影響により活動ができなくなってしまった子ども食堂の再開の鍵を握っているのは開催地ではないかといってきた。しかし、調査結果を見ると多少なりとも開催地が活動再開や活動形態を変化させた理由にはなっていたが、1番大きな理由とまでは至らなかった。しかし、岡

田さんに話を伺っているうちに私なりに思ったことがある。それは開催地が非常に重要になっていたのは2020.3.4月ごろの私たちが新型コロナウイルスというものをまだあまり認知していないが、政府によって出された緊急事態宣言に従わなくてはならず、思うように活動ができなかった時期なのではないかということである。このように思う訳は、新型コロナウイルスの感染拡大とともに子ども食堂へスポットライトが当たる機会が増えた。それは今まで日常的に子ども食堂を利用していた人にとっては急になくなってしまい、更には学校が休校になったことで子ども食堂の存在がいかに大きいものであったかを思い知らされたタイミングであり、このことに便乗し、メディアでも大きく子ども食堂の存在について扱われるようになったからだ。そのため1番子ども食堂を必要としていた時期に活動することができていたところは自宅などを利用して子ども食堂を開催している人ではないかと思う。どこかに会場提供を依頼しているところであると、今こそ子ども食堂が必要とされている時に開催したいと思っても、依頼先が建物の使用許可を出さない限り残念ながら不可能になってしまう。自宅を利用している岡田さんのところも普段通りとまではいかないが本当に必要とされていた時期にお弁当配布という形で活動することができていた。これは母親たちにとって本当に必要とされていたときに活動で来ていたという点については非常に役に立っていたことなのではないかと思う。子ども食堂が着目されたことによって新たな活動が誕生したそう。それは子ども食堂と食材を寄付したいと思っている人の間に社会福祉協議会の方が入り、情報を提供するという活動である。これは2020年の10月からスタートしたまだ新しい試みであるそう。この活動ができたきっかけは新型コロナウイルスが関係している。新型コロナウイルスの関係で飲食店は思うように営業もできず、食材廃棄が多く起こっていた。そんな時メディアで着目をあびていた子ども食堂の存在を知り、廃棄になってしまうくらいなら寄付をしたいと思う人が多くいたそう。しかし、先ほども言ったように2020年3月時点で子ども食堂の活動ができていたところは僅か3割。そのため寄付をしたいと思ってもどこが活動しているのかわからないという状況が発生してしまった。その問題を解決するために誕生したのであった。更にこの活動のおかげで生活困窮者の人など本当に食材を必要としている人に食材が届けられるようになったのである。新型コロナウイルスの影響はすさまじいものであり、多くの死者も出ている。しかし、悪いことばかりではなく、今まで当たり前と感じていた日常に感謝する良い機会になったのではないかとも思う。岡田さんは新型コロナウイルスで1番変化したことは感染症対策をするようになったことだという。消毒や検温、マスク着用のお願い、など多くの手間がかかるようになってしまった。しかし、悪いことだけでなく、今までは子ども食堂のみ運営していたため月に1回のみ開催であった。それが食材提供も増えたことからフードパントリーも開催することにしたのだ。このことにより今までは月に1回しか子どもたちと顔を合わせることができなかったのが月に2回も顔を合わせることができるようになってうれしいと岡田さんは言っていた。

最後に今後のおかださんの台所の活動についてお話を伺った。フードパントリーは今まで月に1回の開催のみであった。しかし、2021年の1月～3月の3か月間は2回開催するそう。2回開催が実現した訳を説明する。岡田さんが「小さな親切を届ける運動」と命名し、【お役に立つ】(お→おかし、や→野菜、く→果物)というスローガンを掲げて赤い羽根共同募金に寄付のお願いをしたところ見事認められることができ、2回のフードパン

トリーの開催が実現したのである。このように小さな親切を積み重ねていくことが大切であると岡田さんは仰っていた。

#### 第4章 終わりに

今回、私は子ども食堂の再開に1番影響を与えたのは開催地ではないかという仮説を立てた。しかし、当ゼミで行った調査結果を見ると開催地が1番の要因にはなりえないことがわかった。もちろん全く関係のないという話ではないが、開催地よりも感染症対策や、政府からの要請に答えることの方が重要であると判明した。確かに開催地1番の要因ではなかったが、岡田さんとの会話の中から見えたようにやはり自宅をそのまま子ども食堂として開催しているところは本当に必要な時にも開催ができていたのではないかと思う。これは今回の私の仮説から見えた新たな発見であると言える。今後の調査では、今回1番の要因となったこととうまく付き合いながら新型コロナウイルスと共存し、新しい子ども食堂の在り方を見ていきたいと思っている。

#### 【参考文献】

新型コロナウイルス感染症について | メディカルノート  
国立感染症研究所